

謡曲 高砂

高砂<sup>たかさご</sup>や 高砂<sup>たかさご</sup>の浦舟<sup>のうらぶね</sup>に 帆<sup>ほ</sup>をあげて  
こ乃<sup>の</sup>浦舟<sup>のうらぶね</sup>に 帆<sup>ほ</sup>をあげて  
月<sup>つき</sup>もろともに 出汐<sup>いでしお</sup>の  
波<sup>なみ</sup>乃<sup>の</sup>淡路<sup>あわじ</sup>乃<sup>の</sup>島影<sup>しまかげ</sup>や  
遠<sup>とお</sup>く鳴尾<sup>なるお</sup>の 沖<sup>おき</sup>過<sup>す</sup>ぎて  
は<sup>は</sup>や住吉<sup>すみのえ</sup>に 着<sup>つ</sup>きにけり  
は<sup>は</sup>や住吉<sup>すみのえ</sup>に 着<sup>つ</sup>きにけり  
は<sup>は</sup>や住吉<sup>すみのえ</sup>に 着<sup>つ</sup>きにけり

### 謡曲「高砂」のあらすじ

阿蘇の宮神主の友成は、都へ行く途中、高砂の浦に立ち寄ると、松の下を掃き清める老夫婦と出会います。

神主が高砂の松について聞くと、尉(じょう)は、これが高砂の松で、自分は住吉に住み、妻の姥(うば)は高砂に住む夫婦だと教えます。

夫婦が離れて住んでいることを不思議に思った神主に、姥は、心が通い合っていれば遠くはないと夫婦のきづなの強さを伝えます。

さらに、老夫婦は、相生(あいおい)の松のいわれやめでたさを語り、自分たちは高砂と住吉の相生の松の精であり、住吉で待つと言い残して小船に乗って沖へ去っていきます。

神主もまた、あとを追い、船に乗って住吉へ向かいます。

住吉に着くと、住吉明神が現われ、颯爽(さっそう)と舞い、民の安全と国の平和を願うのでした。



原画：高砂市観光協会 所蔵